

# エムシに引かれて

面村 登\*

## 1. 守本さんの手引き

“自然ってホントにすばらしいなあ”と心からそう感じたのは、多分15~16才の頃だったと思います。当時小学校教員をしておられた守本陸也さん（現武田薬品農薬研所長、農博、その頃、私の家に下宿しておられた）に連れられて、夏2人で米ノ山に登り、老朽化した山小屋に泊りました。翌朝生まれてはじめて山頂から眺めた雲海の広大さは、それ以後何回かの高山での経験以上のものでした。

守本さんは、その頃ファブルの『昆虫記』に熱中し、独学で昆虫観察をやっておられ、ハキリバチが切りとったウリカエデの葉とか、トルマルハチバチの巣とか、オトシブミがゆりかごをつくっているところとか、ベッコウバチが獲物のコガネグモを草の上に引きあげているところとか、虫の世界のことをいろいろ話してきかされるだけでなく、現地で実物で教えてくださったものです。

本だけでは味わえない別の世界があるのだ！ということを守本さんの手引きによって、少年の日に強烈にインプットしてもらったことは、私の人生に大きな影響を与えました。

自然に興味を持ちかけた私は、それ以後付近の山や畑の植物に関心を持つようになりました。鳥取農専に在学していた頃、久松山や湖山砂丘に、級友の戸田春光兄といっしょに、数十回以上出かけました。「久松山の植物の名前はたいていわかる」などというそぶりでしたが、大山に行ってみると、さっぱりわからず、がっかりしたものでした。当時はいままで知らなかった植物の名前がわかればうれしく、ノートにスケッチしたり、簡単なメモをとって満足していた程度です。20才頃のことです。

## 2. 可児氏の論文

自然観察の方法で、すばらしい野外研究ができることを強く教えられた最初の本は、伊谷純一郎さんの『高崎山のサル』です。伊谷さんたちの研究用具はエニピツと野帳とタタと双眼鏡だけでした。そしてあとはサルに負けない敏捷な足と鋭い観察力です。伊谷さんの本を読んで、私はサルの研究をしてみたく

\* 現住所 〒667-11 兵庫県養父郡関宮町

なりました。ニホンザルの社会構造の解明というあの立派な研究が、僅かこれだけの道具でなしとげられたことに感嘆の目をみはりました。けれども、私一人の力ではとても近づけそうにないと思い、悲観しました。

その頃、また守本さんが助け舟を出してくれました。「この本のここを読み、しかし、〇月〇日までには返してくれ」と半強制的にすすめられたのが、可児藤吉氏の「溪流棲昆虫の生態」という『日本生物誌・昆虫』上に出ている論文です。可児さんの論文は、独創的な川の形態分類から始まって、川面にすむトビケラ、カゲロウ、カワゲラ類の生態が具体的に、実に生き生きと書かれていました。そればかりでなく、次々と新鮮な発想と理論が述べられており、難解な箇所があっても、ドンドン引張っていかれる内容でした。読み終わったとき、今度はそれは自分の足や手や頭で、川虫の研究に取り組みたいと思うようになったのです。

### 3. 野帳のだいで

決心はしても、どこから、どのように手をつけたらよいのか、全くわかりません。鳥取農専卒業後、私は郷里の中学校の理科教員をしていましたが、当時ほ内地留学制度があり、それに応募して幸いに採用され、昭和31年(1956)4月から翌年3月末までの1年間、京大動物学教室の森主一先生の研究室に入らせて頂き、生態学の勉強をすることができました。都合のよいことにその頃動物生態には、河川生態研究グループがあって、京都市北端宇治半島にある宇川の生物調査をしており、私もその中に見習いとして加えてもらいました。宇川の調査は、現地に下宿して、1回の観察や採集に1週間から10日、ときには1ヵ月ぐらいかけるという徹底したものでした。毎日川に出かけて、グループの先生たちや先輩の方から、川に生活する魚や虫の生態や調査の方法について、可児氏の論文をテキストにして直接手ほどきをうけることができました。ここの調査も伊谷氏の研究の進め方によく似ており、川虫をしらべる道具といえば、簡単な採集網と方形枠と虫を入れるびんやビンセットぐらゐです。そしてエンピツと野帳と足が最も有力な武器でした。宇川には、留学中に数回出かけましたが、ここで教えられ、最も身についたことは、自分自身で自然や生物を、時間をかけて根気よく観察して、それをできるだけ克明に野帳に記録することです。私の野帳は現在120冊を超えました。宇川での数冊が「出発点」です。

#### 4. 大串さんとの出会い

こうして私の川虫研究ははじまったのですが、勤めを待ちながらの日曜虫屋では、なかなか進歩しませんでした。例えば「水中で産卵している写真1枚撮る」のでも3年がかりでした。今日はチャンスだと思っても観察に行けません。度々仕事と趣味の面立のむすかしさ、もどかしさに苦悩しました。でも私は理科教師に「たため、子どもたちと共に自然の中で学ぶよろこびを味わうことができ、これによってどんなに救われたかわかりません。職場の先輩や仲間の方々、家族の者たちは、しばしばわがままを寛大に許してくださり、いろいろ助けて頂きました。

でも今日まで、とにかく川虫研究を続けることができたのは、宇川で教えてくださった方々がその後も励ましてくださり、専門的立場から適切な指導をしてくださったからです。中でも大串龍一さん（現金沢大教授）には手ほどきして頂き、引き続いて調査の進め方、研究のまとめ方など指導して頂いております。

宇川で入門から教えて頂いて1年が過ぎようとした頃、ある日私は大串さんの研究室を訪ねて「ヒゲナガとチャバネの幼虫を比べると、いつもヒゲナガの体長や体重が大きいように思います」と報告しました。すると大串さんは「西村さんも同じことに気がつかれましたか。実は私もそのことに気づいていたのです」といわれ、「私もヒゲナガカワトビケラには以前から関心を持っていて少し調べてきたのですが、今後この仕事は西村さんにお譲りしましょう」と大串さんがこれまで集められていたヒゲナガに関する文献のメモなど、あっさり私にくださったものです。

大串さんにお出会いしていなかったら、私の川虫研究は一歩も進まなかったことでしょう。

#### 5. エムシに引かれて

宇川で教えて頂いた翌年の5月上旬、早朝4時30分頃、円山川支流八木川の岸へ行ってみると、数千匹のヒゲナガが群飛しているのに出くわして、私の胸は高鳴りました。森主一先生の論文に書かれている通りの事実をそこに見たからです。さらに同じ5月の別の日の夕方、私は川岸でヒゲナガの群飛を観察していました。ところが、群飛に加わらない虫がいて、流水の中央を水面すれすれに飛ぶのを見つけたのです。早速捕虫網を持って流心に入り、20匹ぐさい捕えてみると全部ヒゲナガの雌です。流心に立っていると、次々に飛んできて中には顔にぶつかる虫もいます。次の日も次の日も、うす暗くなるとヒゲナガは

飛び出しました。飛び方向は下流へ飛ぶものもいますが、かなり多くの虫が上流へ飛んでいきます。一方、成虫の分布域を季節を追ってしらべていくと、繁殖期の初夏には上流側へ拡がりますが、秋から冬にかけては下流側に片寄ってしまいます。このことはまだどなたも報告してありません。そこで、幼虫の流下と成虫の溯上飛行とは、何か関係があるのではないかと考え、“生息域循環”の仮説を提唱したわけです。1959年のことです。それ以来もう20年経ちましたが、この仮説はまだ充分証明されたわけではありません。著者の故の富田のたぐいかも知りません。でも、これがひとつのきっかけになって、私の川虫とのかきあいが今日まで続いているわけです。ただつきあいが長いというだけで、まだまだわからないことばかりです。これから細々とでも、エムシたちとのつきあいを続けていきたいものと情熱に燃えております。

#### (付 記)

まだひとつの研究もは上げていない未熟者が、このような文を書くこと自体大変おこがましいのですが、旦馬むくの会編集部の若い方のおすすめで、おえて雑感を記しました。

ヒゲナガカワトビケラは、日本各地の礫底の川でよく目立つ普通種、私の地方の方言では、幼虫をエムシ、成虫を千ヨコといひ、金サリの餌に用いられる。